

「男、突っ走る！」

第56回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

木内 雅也 (21)	名古屋芸術専門学校 3年生
木内 孝志 (50)	雅也の父
木内 真保 (48)	雅也の母
眞榮田 浩平 (21)	名古屋芸術専門学校 3年生
福本 瑞枝 (21)	名古屋芸術専門学校 3年生
長井 夏美 (21)	名古屋芸術専門学校 3年生
加藤 直也 (21)	名古屋芸術専門学校 3年生
植野 雪奈 (21)	名古屋芸術専門学校 3年生
本 部 明 美 (20)	名古屋カフェ調理専門学校 2年生
山 岡 智 行 (31)	映画プロデューサー

1 地下鉄・出口

雅也が走って階段を上ってくる。

N 「十月のある土曜日、僕は午前の授業を終えた足で、ショッピングモール」まで向かっていました。数日前、突然映像専攻の加藤から遊ばないかと誘われたからです」

2

ショッピングモール・ゲームセンター

UFOキャッチャーをしている雪奈――

――傍らで見ている瑞枝。

UFOキャッチャーが、ぬいぐるみを

掴んでいく。

雪奈「やったー！」

瑞枝「すごい、ゆきちちゃん」

×

×

×

メダルゲームをしている直也――そこ

へ、雅也が駆けつける。

雅也「加藤、おまたせ」

直也「お、やっときたか」

瑞枝と、ぬいぐるみを抱えた雪奈が合

流する。

瑞枝「あれ、うちー来たじゃん」

雪奈「遅かったね」

雅也「俺だって早く来たかったよ。でも、土

曜日は昼まで授業だったから」

瑞枝「じゃあ、授業終わってそのまま？」

雅也「うん。学校から駅まで猛ダッシュだよ」

雪奈「そんなに早く来たかったんだ」

雅也「だって、せっかく加藤が誘ってくれた

わけだもん。遅れてだって来るよ」

3 居酒屋（夜）

雅也、瑞枝、直也、雪奈が飲んでいる。

雅也「そっか。加藤、今月末からもう東京行
っちゃうんだ」

直也「ああ。早い研修期間ってことで」

雪奈「寂しくなるね」

瑞枝「私も、いい加減決めないとな」

雅也「まあ、俺も先月にYouTubeドラマが決ま
っただけで、まだ進路という進路が定まっ

てないけどね」

直也「けど、在学デビューできたんだろ」

雅也「そりゃ、デビューとしては決まったかもしれないけど、だからって卒業後までその仕事が続くわけじゃないんだから（とグラスの残りを一気に飲む）」

雪奈「え、うちー飲みすぎじゃない？」

直也「お前、大丈夫か？」

雅也「大丈夫。これぐらい」

瑞枝「私が焼酎進めてから、うちー結構飲むようになったもんね」

フラフラし始める雅也。

雪奈「ああ、こりゃ酔いが回り始めたね」

雅也「そんなことないわよ」

直也「木内がこうなるってことは、酔ってるな」

4 駅・ホーム（夜）

ベンチで休んでいる雅也——ペットボトルの水を瑞枝が持ってくる。

瑞枝「はい、お水」

雅也「ごめん、ありがとう」

瑞枝「大丈夫？」

雅也「（水を飲みながら）うん、ちよつと楽になった」

瑞枝「なら良いけど」

雅也、しゃつくりを何度もしだす。

瑞枝「どうした？」

雅也「しゃつくり止まらなくなっちゃった」

瑞枝「（雅也の背中を叩き）え、どう？」

雅也「（しゃつくりを出して）ダメだ、止まらない。あ、こういう時は首をひっこめて

水を飲めば良いんだ」

と、首をひっこめて水を飲む。

瑞枝「どう？」

しゃつくりを出す雅也。

雅也「ああ、止まらない」

苦笑して見ている瑞枝。

N「みずちゃんと飲む機会は、増え始め、十一月の中旬には、お互い十一月生まれだから

らと、ささやかに二人で誕生祝いをしました
た」

5 居酒屋『とんちゃん』・全景（夜）

カウンター席で、焼き鳥を食べながら
飲んでいる雅也と瑞枝——串を焼いて
いる大将と接客をしている若女将。

瑞枝「私が十一月二十八日、うちーが十一月三日。ちょうど、お互いの誕生日の間に
お祝いするっていうのが良いよね」

雅也「みずちゃんだったら、ここの上串また
食べたいんじゃないかなと思って」

瑞枝「うん」

雅也「そういえば、この間の誕生日の日、日
付指定で、東京に行った加藤から荷物が届
いたんだよ」

瑞枝「荷物？」

雅也「うん」

7 木内家・雅也の部屋（回想）

段ボール箱の封を開ける雅也——二次
元イラスト付きのレトルトカレーパッ
ケージを二つ手に取る。

『甘口彼氏カレー』『激辛彼女カレー』
と書かれている。

雅也の声「あいつ、彼氏カレーと彼女カレー
っていう、レトルトカレー送ってきたんだ
よ。俺の誕プレにつて」

呆れ顔の雅也。

8 居酒屋『とんちゃん』・店（回想戻り）

瑞枝「加藤らしいチョイスだわ」

雅也「みずちゃんも、誕生日プレゼントあり
がとう。小説、ゆっくり読むね」

瑞枝「たまには、違うジャンルも良いんじゃないかなと思って、ミステリー選んだけど」
雅也「大歓迎。自分で買おうと思うと、どう
しても好きなジャンルになっちゃうからね。」

ちょうど良かった」

瑞枝「やっぱり、誕プレっていうのは、喜んでもらうために選ぶのが良いよね」

雅也「去年だって、眞榮田と一緒に誕プレ用意してくれたじゃん」

瑞枝「そうだったね」

雅也「早いね」

瑞枝「うん」

雅也「楽しい生活も、あと四ヶ月で終わりか」

瑞枝「まだまだ学生やっていたいよね。もっと勉強すれば良かったかな。リセットしたい気分だもん」

雅也「……もう、未練ないの？ 梶川のこと」

瑞枝「うん、あんなに引きずってたのが、バ

カみたい」

雅也「そっか」

瑞枝「恋愛のことなんかより、進路のこと、もういい加減決めないとなあ」

雅也「そうだね……。東京の会社にするの？」

瑞枝「一応その予定。うちーは？」

雅也「まだ考え中。実はね、俺、来月千葉に行く予定ができたの」

瑞枝「千葉？」

雅也「うん。実はね、映画製作をしてるプロダクションがあって、そのプロデューサーが、次の映画の脚本家を募集してるの。だから、せっかくの機会だと思って、問い合わせのメールを送って、前に作った雑誌風のポトフォリオを郵送したの。そして、ぜひ一度お会いしたいってことになって」

瑞枝「すごいじゃん。やっぱり、これまでにいろいろやってきたうちーだもん、その努力が認められてたんだよ」

雅也「そうかな」

瑞枝「決まると良いね。私、応援してる」

雅也「ありがとう。俺も、みずちゃんの進路が早く決まるように応援してるから」

瑞枝「私たち、いつの間にか支えあうようなことになってたね」

雅也「分かんないもんだね」

瑞枝「うん」

雅也「そういえばさ、最初にここに連れてきたときって、時系列で言えば梶川と付き合ってたときでしょ」

瑞枝「だね」

雅也「あいつ、何か言っていなかった？ だって、自分の彼女が、男とサシ飲みするんだよ」

瑞枝「一応話したの。『うちーに、飲みに誘われた』って。そしたら、『うちーなら大丈夫』って言われたから」

雅也「それはそれで、何か複雑だな」

瑞枝「うちーなら人の彼女を奪うようなことをしないって思ってるんじゃない。ほら、うちーってうちの学校のマスケットキャラクターみたいじゃん」

雅也「まあ、男でも女でもない、うちーっていう一つのキャラクターみたいもんだからね」

瑞枝「そうそう」

雅也「そうそうって」

瑞枝「何だろうね、うちーという安心感とでも言うのかな」

雅也「一年生の時、一家に一台ならぬ、一専攻にうちーだって言ってくれたっけ」

瑞枝「あったね、そんなことも」

雅也「仲良くさせていただいて、ありがとうございます
ございます」

瑞枝「いえいえ、こちらこそ」

と、若女将が土鍋の湯豆腐を運んでくる。

若女将「はい、湯豆腐ね」

雅也「え？」

若女将「私からのサービス。二人とも、誕生日祝いで来てくれたんでしょ。これは、私からの気持ち」

雅也「ありがとうございます」

瑞枝「すいません、ありがとうございます」

若女将「ごゆっくり。(と大将に)お父さん、

早くしてよ。ほら、焦げてないそれ？」

大将「大丈夫だよ、これぐらい」

瑞枝「良いところ、紹介してもらったわ。ありがとう」

雅也「どういたしまして」

9 木内家・居間

雅也と孝志が話している。

孝志「そっか。今日、『とんちゃん』行ってきたのか」

雅也「やっぱり、あそのの上串は美味しいね」

孝志「串だけでも良いけど、俺はいつも、ご飯

と味噌汁つけて、定食にしてもらってたな」

雅也「ああ、それも良いね」

孝志「今日も結構飲んだのか？」

雅也「二杯しか飲んでない。みずちゃんは、

三杯サワーばかり飲んでたけど」

孝志「強いのか、みずちゃんは」

雅也「まあ強いよね。焼酎だって、最初に進めてきたのはみずちゃんなんだから」

孝志「潰されないようにしろよ」

雅也「はいはい」

10 名古屋芸術専門学校・全景

11 同・4階・廊下

雅也がエレベーターから出てくる――
夏美がベンチに座って昼食を食べてい
る。

雅也「あれ、眞榮田と大久保は？」

夏美「今日、テレビ局のバイト」

雅也「そっか。もう就職先で、一足早く仕事
してるんだ」

夏美「そうそう」

雅也「なつ姐さんは、四月から東京だっけ？」

夏美「そう。表参道にあるCG制作会社」

雅也「また随分と都会だね」

夏美「まあね」

雅也「やっぱり、加藤も眞榮田も大久保もい
ないと、映像専攻も寂しいね」

夏美「うん。みずちゃんは、今図書室で求人票見に行ってる」

雅也「そっか」

と、雅也のスマホに通知が来る——雅也、画面を見ると、

雅也「あ……」

12 名古屋カフェ調理専門学校・表（夕）

明美が待っている——雅也が走ってやってくる。

雅也「お待たせ」

明美「ようやく行けますね」

雅也「ごめん」

13 鶴舞公園（夜）

雅也と明美が歩いている。

明美「枯れちゃいましたね。せっかく紅葉見ようと思ったのに」

雅也「ごめん。完璧誘うの忘れてた。そっちから声かけてくれたら良かったのに」

明美「だって、先輩忙しそうだったから」

雅也「そんなことないって。声がかかったら、
駆け付けるのに」

明美「良いですよ。こうして来ただけで」

雅也「あと四ヶ月で、こんなふうになり明美ちゃんに
いじられるのも終わりか」

明美「寂しいこと言わないで下さいよ」

雅也「四月から東京でしょ。ケーキの製造会社
に就職決まったって教えてくれたじゃん。
ゆっくり遊べなくなるね」

明美「就職決まったのは、先輩のおかげですよ」

雅也「どうして？」

明美「履歴書の添削してくれたじゃないですか」

雅也「ああ、あれね」

明美「東京に遊びに来て下さいよ。私、待
ってますから」

雅也「うん、ありがとう」

14 駅・表

真保が車を運転してくる——助手席から雅也が降りてきて、後部座席からスーツケースを取り出す。

雅也「じゃあ、行ってきます」

真保「気を付けるのよ。向こう着いたら、連絡して」

雅也「はいはい」

15 道（夜）

雅也が鞆を持って歩いている——隣でスーツケースを運んでいる浩平。

浩平「これで決まれば、うちも本格的に脚本家としての人生が始まるわけだ」

雅也「そうなるの良いんだけど」

16 名古屋駅（夜）

雅也と浩平が歩いている。

雅也「ありがとう、スーツケース運んでくれて」

浩平「良いってことよ」

雅也「じゃあ、行ってきます」

浩平「頑張ってきてよ」

雅也「うん」

N「スーツケースを運んでくれた眞榮田に見送られ、僕は十二月中旬、夜行バスに乗って東京まで向かいました」

17 新宿駅（早朝）

高速バスが到着する——バスから降りてくる雅也。

N「翌朝には新宿に到着し、予定の時間まで僕は、一人で慣れない東京観光を田舎者丸出しでしていました」

18 東松戸駅（夕）

スーツケースを運んだ雅也が出てくる。
N「プロデューサーと集まる場所の最寄駅は、東松戸駅だったのですが、僕は何故か降りる駅を間違えて、一度は新松戸駅に降りて

しまったのです。その後、慌てて本来降りるべき東松戸駅に何とか到着することができました」

19 ファーストフード店

ハンバーガーを食べている、映画プロデューサー・山岡智行（31）——ドアが開き、雅也がやってくる。

雅也「あの、山岡さんでいらっしゃいますか？」

山岡「ひよつとして、木内さんですか」

雅也「はい。木内雅也です」

山岡「はじめまして、山岡智行です。さ、どうぞおかけください」

雅也「失礼します。ひよつとして、お待ちせしまったんじゃないやありませんか？」

山岡「いえいえ。仕事もしたかったものですから、早く来てたんです」

雅也「そうでしたか」

山岡「先日メールでお送りした資料、ご確認

いただけましたか？」

雅也「はい。（と鞆から書類を取り出すと）

それで、自分なりに登場人物を作り上げて、
大まかなプロットも考えてみたんです」

山岡「拝見します（と資料を読みだす）」

真剣な眼差しで見ている雅也。

山岡「良いですね。登場人物については、モデル事務所やアイドル事務所との兼ね合いもあるので、もっと出番を増やしてもらったり、メインどころのヒロイン的なキャラを作ってもらえば必要が出てくると思います」

雅也「分かりました」

山岡「ここまで作っていただいているのなら、話は早い。ぜひ、脚本をお願いできませんか？」

雅也「え…：本当に、よろしいんですか？」

山岡「今回の企画は、僕にとっても大きな挑戦だと思ってるんです。そのためには、関係者にも納得いただくプロットや資料が必要になると思ってたんですが、ここまでし

ていただくと、僕もやりがいがあります」

雅也「ありがとうございます」

山岡「一緒に、良いものを作りましょう」

雅也「はい、よろしくお願いします」

握手を交わす雅也と山岡。

20 横浜の道

スーツケースを運んだ雅也が歩いていく。

N「この日、僕は一度東京まで戻った後、電車を乗り継いで、横浜に住んでいる加藤のもとへ一晩泊めてもらうことになっていました。昨年の大久保、今年の夏の眞榮田、そして今回の加藤と、僕は映像専攻の男子三人の家に泊まった唯一の同級生となりました」

21 横浜・直也のアパート

枕投げをしている雅也と直也。

雅也「この野郎」

直也「そんな強く投げるなよ」

雅也「そっちが先にやったんでしようが」

直也「意外とお前強いな」

雅也「そう？」

直也「地味に痛い」

雅也「じゃあ、もっと強くしてやる」

直也「おい」

N「加藤との時間はとても楽しいものでした。

加藤も僕がお世話になることを喜んでくれ

ました。翌日、僕は加藤に見送られ、その

日の晩に新宿を出発する高速バスに乗り、

次の日の朝に名古屋に戻った僕は、そのま

ま学校へと向かいました。この時僕は、就

職ではなくフリーでやっていこうと心に決

めたのでした」

つづく